



第98号

鯉淵学園同窓会

同窓会報

令和7年5月31日

発行：鯉淵学園同窓会

〒319-0323

茨城県水戸市鯉淵町 5965

TEL : 029-259-2811

FAX : 029-259-6965

http://koibuchi.main.jp/

メールアドレス:koibuchidousou@gmail.com

創立80周年記念

同窓会長あいさつ

「建学80周年記念事業への寄付金の御願い」

黒澤 賢治
(25期卒)

創立80周年記念事業実施に伴う寄付金の御願いと変わらぬ支援を

昨年は1月1日発災の能登半島地震

に始まり、多くの同窓生の皆様より被災地在住の同窓生の一日も早い復興支援のために、貴重な「復興支援金」を

御寄せ頂き、被災地の皆様に感動を与えて、意義ある支援の形を被災地に贈る事が叶い、同窓会の役割と機能を

全うする事が出来感謝申し上げる次第であります。

また、今回は「鯉淵学園創立80周年記念事業」実施に伴う寄付金の御要請を同窓生の皆様方に御願いさせて頂く事となり、恐縮している次第であります。

また、「80年の鯉淵学園のメモリアル」と「リスタート」の起点となる節目に致したく、財団法人鯉淵学園・学園サ

イド・同窓会が相計り、将来共に、喜びが共有できる「価値ある記念事業」を目指し、企画に取り組んでまいります。

不安定な社会情勢、景気浮揚がままならない実態、同窓生の高齢化等、極めて厳しい環境下での「寄付金」

集めが予測されますが、特段なる御理解と御協力を重ねて御願い申し上げます。

11月21日「創立80周年記念式典」を予定

式典開催にあたり、「記念フォーラム」を併せ開催し、農業・農村・食品産業界等のトップランナーを御迎えし、日常、大変御世話になつておられる茨城県をはじめ関係機関そして同窓会の皆様方を交え「鯉淵学園からの発信」をさせていただきたいと企画しております。コロナ禍を経て県別同窓会も再開されて来ておりますが、直近では期別同窓会が全国各地で企画されつつあります。あらゆる機会を通じ「鯉淵学園80周年記念事業」に対する御理解と支援の輪が全国に拡大します事を念じてやみません。青雲の志と大きな夢を抱いて鯉淵の里に集い、2~4年間の寝食を共にした「鯉淵学園」も80周年を迎えます。大いなる節目を刻みたい

関との連携改善にその力点を集約し、将来を見据えた体制整備を記念事業としたいと考えております。既に小・中・高の教育においてはタブレット端末の活用が普遍化しており、コロナ禍の「リモート授業」にも対応が困難であった学園内の体制を順次、整備していくたいと考えております。

多くの卒業生を輩出し、多くの「実践的農業・農村指導者」を育成して来た学園も、幾多の学制改革や学科再編を繰り返しつつ、時代要請に沿つた「学園運営と教育理念の実現」に奔走してきました。

茨城県東茨城郡内原町に広大なキャンパスと実習農場を有し、戦後の農村社会・コミュニティの復興・再生・営農集団の新たな創生をリーダーとして支える人材の養成拠点として、多機能にわたる成果と顕著な類例を日本農業に与えつつ、独自の崇高な「実学・実践主義」を貫いた唯一の学舎であつたと言えます。全寮制完全自治生活の教育は学生達の「自主性・人間修養」の原点となつて、今に生かされていると確信しています。80年、多くの事があつたが、2年制・3年制・4年制の専門学校として、同窓生の温かい支援と御理解を頂く中で学園は存続し、新たな時代を目指し歩みを継続しています。

「高度な教育環境の基本をなす体制整備」を記念事業に

かつての「記念事業」は、図書館建設・同窓会会館建設・農産物直売所「農の詩」建設等、後年度経費が累増するハードな諸施設が中心でしたが、教育実践体制の拠り所となるIT・AI・Wi-Fi等の機能整備を中心に、国庫補助金を頂きつつ授業・研究・他機

関との連携改善にその力点を集約し、将来を見据えた体制整備を記念事業としたいと考えております。既に小・中・高の教育においてはタブレット端末の活用が普遍化しており、コロナ禍の「リモート授業」にも対応が困難であった学園内の体制を順次、整備していくたいと考えております。

従つて、「基本教育体制整備事業」のベース事業費は、4,000万円余が必要となり「同窓会記念事業寄付金」の目標を2,000万円とし8,000名余の同窓生・関係機関等に御要請致したいと考えますので御理解・御協力を重ねて御願い申し上げる次第であります。

かつての「記念事業」は、図書館建設・同窓会会館建設・農産物直売所「農の詩」建設等、後年度経費が累増するハードな諸施設が中心でしたが、教育実践体制の拠り所となるIT・AI・Wi-Fi等の機能整備を中心に、国

学園創立80周年を迎えて



理事長
森 啓一

現在の姿

農と食は、我が国の成長の基盤となるものであり、必要不可欠なものであります。しかしながら、現在、食の安全性・食糧問題は日々深刻となっています。

農業所得の大幅な減少、後継者不足の深刻化、食料供給に対する不安、そして農村活力の低下等が問題視されています。

人が生きていく上で、最も大切な農と食の問題を蔑ろにして、社会の健全な発展はあり得ないと考えます。

今日、農業、食品分野においても、革新的な技術や知識が必要とされる時代を迎えており、私たちもこれまでの伝統と精神を守りつつ、未来を見据えた教育を行なななければなりません。

学生たちが新たな可能性を探求し、そして挑戦し、地域社会と連携しながら農業の発展に寄与する力を養うべく、さらに努力を重ねていく所存です。

これまでの姿

80年前、鯉淵学園は、農業教育を通じて、地域社会の発展のみならず、日本を支える使命を胸に設立されました。学園発足当初、初代学園長であられた小出先生は、学生募集の中で、「教育の本質は個人の完成にあり、確固たる信念により動き、自己の責任を果たし、よく社会を担う人物とならねばならない」さらに教育という観点から、「農業を通じて、「國家再建に命がけで取り組む人物を期待する」と記されました。

それ以来、多くの卒業生が今日まで農と食の分野で活躍し、持続可能な社会の実現に向け、大きく貢献してきました。鯉淵学園は、ただ教育を提供する場ではなく、農と食の未来を創造する場所としての役割を、今日も果たし続けています。

最後に

鯉淵学園は、「真生鯉淵」をスローガンとしています。真生とは、新しく生まれるの新生ではなく、真に生まれるという意味での真生です。

そのため最も重要なのが教育であり、これまで鯉淵学園が大切にしてきました

はじめに

鯉淵学園同窓生の皆様、いつもご支援いただき、心より感謝申し上げます。

今年度、我が鯉淵学園は創立80周年という偉大な節目を迎えることになります。この特別な年を迎えるにあたり、過去から現在にわたり学園を支え続けてくださった学生、教職員、同窓生、そして地域の皆様に心より感謝申し上げます。

これから姿

80周年を迎えるにあたり、私たちは過去を振り返るとともに、将来に希望を見出す機会としたいと思います。農業の持続可能な発展を目指し、教育の質を高め、社会への貢献を続けることで、次の世代へ、より良い未来を受け渡すことを目指します。

これからも、多くの方々と力を合わせ、農業教育の可能性をさらに広げていけることを楽しみにしています。

学園創立80周年を迎えて



学園長
長谷川 量平

現在なされていると思います。

本学園もまた、時代の変化に適応しながら、実学を重視した教育を提供し続けております。これまでの伝統を守りつつも、未来を見据えた新たな取り組みを行ない、より質の高い教育環境を整備することで、次世代を担う学生たちの成長を支えています。

同窓生の皆様にとって、鯉淵学園での学びや仲間との思い出は、かけがえのない宝物であることだと思います。この学園で培われた知識や経験、そして人とのつながりが、皆様の現在のご活躍の礎となっていることを大変嬉しく思います。また、同窓生同士の絆は、学園の発展にとっても非常に重要なものです。今後もこうしたつながりを大切にし、同窓会活動を通じて新たな交流の場を築いていくことを願っております。

本学園がこれからも発展を続け、さらなる飛躍を遂げるためには、卒業生の皆様のご支援とご協力が不可欠です。同窓会がより一層活性化し、世代を超えた交流が生まれることで、学園と社会全体の発展にもつながることでしょう。これからも母校を支え、後輩たちの成長を温かく見守っていただければ幸いです。

80周年の記念事業として、本学園内



DX（デジタルトランスフォーメーション）化を行いたいと思います。学園内は建物間通信施設がありますが、設置後20年が過ぎ、老朽化だけでなく、通信能力を大きなものに変え、学園内の教育力を大きく向上させたいと思います。学園内すべての施設で通信網を整備するには2千万円近くかかりますが、皆様方からのご寄付による淨財と、農業教育施設整備補助金をうまく組み合わせて、最大限の効果を得たいと思います。後輩のため

学園80年の思い出 「鯉淵学園と我が人生」



名誉教授・
農学博士（東京大学）
西村 典夫（4期卒）

最初に鯉淵の土を踏んだのは昭和21年
の早春、全国農業会・高等農事講習所入
所試験の時であつた。受験生3,000余
名から200名近くの合格だから、さぞ
素晴らしい学校であろうと期待して入所
したが、だんだん様子が分かつて来ると、
おんぼろ校舎に杉皮葺きのバラック学生
寮、辞めようかと思わないでも無かつた
が、郷里の会津を出るときに沢山の餓別
を貰つて來たし、何より優秀な友がずら
り。明確な目標を持つていたわけでは無
いが、午前中講義、午後農場実習。春秋
それぞれ2～3週間の農繁終日実習なる
ものがあった。授業はさほど負担に感じ

ながら数千冊？の古本を備えた図書室の本を片つ端から読みあさつて楽しかった。第2次世界大戦敗北の翌年だから食料不足、衣類も無く、住まいも雨風を凌げれば上々と言うべきだつたか。学費は授業料・学生寮費無し、食費も募集要項では只であつたが、入学時1ヶ月30円の負担（今なら数千円といったところか）であつた。そんな状態で小遣いの多くは時々水戸、たまには東京神田に行つて古本を買つた。

専任、外来と多くの先生にご指導を頂いたが、中でも小出満一先生（所長・農業教育）、藤岡孟彦先生（植物病理）、上村高直先生（哲学・倫理）、鞍田純先生（教頭・農政）、石橋幸雄先生（農業経営）、近秀次先生（憲法）には特別にお世話になつた。それぞれのご専門のみならず、諸先生の人生そのものに接する機会に恵まれた。劣悪な食糧難の時代に再三ご馳走になつたり、お風呂上がりの歎談も遠い遠い昔話になつたが、大変ご迷惑であつたうなと恐縮しつつ、今もつて鮮明に想い浮かんで懷かしい。

まで、学園舎宅に住み続けた。全寮制度を標榜する鯉淵学園教育の基本理念に添え続けたという、ささやかな安堵感があった。

敗戦間もなく、連合軍司令部は、全国農業会の解体を命じ、昭和22年に高等農事講習所教育を継承する、財團法人農民教育協会を立ち上げ、翌23年に農民教育協会高等農事講習所になり、全国農業会は解散となつた。途端に教育財政は極度に逼迫して職員も運営費も大幅な削減をせざるを得なかつた。学生の負担増も伴つて、昭和21年4月

不安定な学園の財政基盤

敗戦間もなく、連合軍司令部は、全国農業会の解体を命じ、昭和22年に高農事講習所教育を継承する、財團法人農民教育協会を立ち上げ、翌23年に農民教育協会高等農事講習所になり、全国農業会は解散となつた。途端に教育財政は極度に逼迫して職員も運営費も大幅な削減をせざるを得なかつた。学生の負担増も伴つて、昭和21年4月

卒業時は120名に減少した。日本における学校教育法上の格付けは各種学校であつたから、講習所卒業生に社会的に通ずる卒業資格はなかつた。しかし実力はあつたと思つてゐる。例えはその年に行われた第1回・農業改良普及員資格試験では、全員が合格、それもずらりと最高点であつたから、外部の関係者は驚いたらしい。私自身、講習所の理念と実践に幾つかの不合理と思うこと也有つたが、後戻りも出来ず、4期生の1人として卒立つた。第1回の入学で第4回卒業生と言うのは、敗戦によつて廃止された満蒙開拓指導員養成所の皆さんが1~3年生として編入され、それぞれ1~3期生として卒業されたからで、それも理由の1つとして4期生は昭和21年7~8月に教育改革のストライキをやつた。私は1~3期の方々に責任があるとは考えられなかつたので、参加しなかつた。勿論退学を決めていたが、一件沈静し、退学すべきは我々なんだからとみんなに慰留されると、つい決心も鈍つて、今振り返ると最も長く鯉淵に居てしまうことになつた。私は文部省管轄だとか、農林省管轄だとか繩張り争いをやつてゐないで、しつかり所定の教育課程を済ませた者は、どしどし社会貢献の機会を提供すべきだと思つてゐる。24年~25年の頃は、高等農事講習所鯉淵学園、26年に鯉淵学園と改称したように思う。戦後の学制改革で7期生から2年制、農協科廃止を伴つて27期生から3年制。その後4年制、そして私が退職して程なく、鯉淵学園農業栄養専門学校4年制となり、その後また2年制に変わり、まさに鯉淵学園はめまぐるしい程に翻弄に翻弄を続けて現在がある。

就職

喉もと過ぎれば熱さを忘れるの諺にも似て、深い反省からスタートした国造りも情けない程に変容してしまった。飽くなき便利性を追求するあまり、国土は荒廃の一途を辿りつつある。謙虚な心構えで歴史に学び、とかく忌み嫌われる農村社会に飛び込んで、その経済的、社会的、文化的地位の向上を目指して汗を流そうとする不屈の人材を育成する必要は昔も今も変わらない。鯉淵学園の社会的役割が終了したかのよつた論調もあるが、そうではなくて、創立の目標を実現できる、教育環境を整え、その実を上げていかなればならない。支援の体制は、農水省、農業団体は勿論、広く国民的な大きな輪を形成する努力が欠かせない。それは農民教育協会とか、鯉淵学園発展の為とかいう些純なものではなく、日本国民みんなのために必要だからである。日本農業は金ばかりかかるから、外国から安い食料を買えば良いとともに考へている国民も少なくないよう思う。しかし幾ら金を積んでも国民の食料(取り分け食糧)が手に入らない時が来ない保証は全くない。私はこの辺の自覺を全国民が理解すべきで、特に国政に携わる方々に肝に銘じて欲しいと訴えたい。



昭和 20 年頃 正門付近からの眺望 南寮 6 棟と大講堂など

鯉淵学園農村社会研究会「友の会」のようには志相携えて、生涯交流を深めながら、互いに助け合い、励まし合う組織が望まれる。現在、それを支援する筈の鯉淵学園も、また同窓会も極めて弱体と言わざるをえないが、どうか、めげずに活動を続けて欲しい。末筆ながら会員の皆さんますますのご健勝を鯉淵の地から祈つて止まない。

※鯉淵学園農村社会研究会

友の会 会報 「あゆみ」より転載。

高度経済成長期が終わる頃の昭和 47 年に学園へ入学いたしました。オイルショック、沖縄の返還、学生運動の終焉等ありました

が、学園にはその頃の若者の純粹さとエネルギーが充満していました。

女子(紫苑)寮では、4 階半の小さな部屋に 2 人、小さな練炭炬燵を間に布団を敷いて眠るなど、驚きの連続でした。

寮長などを経験し、人の前で話をする、自分の考えを伝える等、人生の初めてを

沢山経験しました。楽しかったですね。寮費はみんなで使う共通費だけで、住居費や電気・水道料金など支払った覚えがありません。机やストーブ・洗濯機・冷蔵庫・テレビなども用意してありました。

学園は私たちの生活を丸抱えて支えてくれていました。同級生たちも、教育費の安さを進学先に選んだ理由の一つと言つておりました。これに共感される卒業生の方は多いのではないでしょうか。

直接学園の教育に関わらなくなつて 30 年にならうとしているが、専門科目に比重を置きすぎると、目先は役立ちそうだが、私の経験では、専門教育は短命に終わり易いと思う。急テンポの現代社会、学生時代に習つたことの多くは程なく時代遅れで役に立たなくなつてしまつ。やはり自分で考え、難題を恐れずに挑み、解決前進してゆく実力を養うべきであります。それには卒業のしつばなしではなく、

むすび

客員教授
入江 三弥子
(29期卒)

学園創立 80 周年を迎えて

した。社会人のイロハは白田喜代志先生に教えていただき、なんと仕事始めは先生と一緒に女子寮の風呂のタイル修理でした。「寮生活と学生食堂がなくなつたら学園は変わる」と常々聞いておりました。だからこそ、寮や食堂の運営に取り組んだのです。また、当時白田先生は日本栄養士会茨城県支部の会長でした。研究室が事務局を兼ねており、白田先生のお供で勉強させていただきました。その頃から県や病院・学校の栄養士との付き合いがありましたから、そのお陰で人脈ができました。

先頃、栄養士の話がテレビで放送されました。栄養士の仕事の一端が皆さんに知られて良かつた。学園の栄養士養成は昭和 45 年に開始し、55 年になります。卒業生は約 1,250 人になるようです。(*鯉淵学園における栄養士養成課程設置 50 年の軌跡・浅津竜子)

いつの間にか栄養士養成に携ることになりました。3 年制から 4 年制課程になり、管理栄養士への道が開けた時にはとても喜びました。このころの卒業生は、色々な研究活動をやることができました。しかし、突然軌道に乗つて 4 年制度から 2 年制度に縮小することになつてしましました。時間がない状況でしたので待つたなしで計画し、申請しました。そして 2 年制度の栄養士養成は茨城県内の高校生に好評でした。こんなに学生募集がうまくいったのは初めてでした。

昭和から平成の卒業生は「寮生活が楽しかった」と言つてくれます。学園の理想を信じて、人が成長していくお手伝いができる喜びでしょうか。善意の人の中で仕事できましたこと感謝しています。

卒業後学園に入職し、助手を拝命しました。

創立80周年を迎える

学園の近況



農業技術センター長
秋葉 勝矢
(46期卒)

はじめに

日頃より本校教育事業へのご理解、ご協力を賜りまして誠にありがとうございます。

4月頃より本校教育事業へのご理解、ご協力を賜りまして誠にありがとうございます。

理念を基に

令和5年度より新体制となつてから今まで3年目を迎えます。代々受け継がれてきた教育理念「1.ヒューマニティーを基調とした、広い視野と科学的な考え方と実践力を育成する。2. 多数の人々と協力して農と食改善・発展に寄与できる指導力を育成する。」は基より、森理事長の打ち出したスローガン「真生鯉淵責任・団結・信頼」を御旗に学生と教職員一丸となりあらゆる分野で邁進しております。

私が学園に入学、そして卒業したのは同窓生の視点に立つと

創立80周年を迎える

学園の近況



食品栄養科副科長
浅津 竜子
(47期卒)

学生募集にご協力ください

4月2日に入学式も終え、本科生・研修生合わせて40名の学生を迎えることができました。創立80周年という節目の年に入学した新入生は、日々同級生や先輩達と仲良くなり、少しずつ学園生活に慣れていく様子がうかがえます。

本校は、今年で80周年を迎えました。私は卒後30年です。入学のきっかけは、兄が在籍していたこと（農業科45期）です。そして両親からのアドバイスにより生活栄養科（栄養士養成課程）を選択しました。在学時は、学生食堂のアルバイトを通じ大量調理や食事提供に馴染み、先生方からは管理栄養士の資格取得を勧められ、また、夫（農業科47期）との出会いもありと様々な関わりにより、生活栄養科の助手として平成5年4月に入職しました。それ以来、絶縁曲折ありながらも皆様方に支えられ現在を迎えております。

18歳人口減少問題や社会情勢などにより、近年の鯉淵学園における学生募集には苦慮しておりますが、教職員一同学園の持つ特色や魅力を高校訪問以外でもPRしております。また、最近では学生が自ら得意分野であるSNS等を駆使し、学園や学生生活を情報発信してくれています。多方面でご活躍されている同窓生のみなさまにおかれましても、次の90周年、100周年、さらにその先へと是非学生数増加にご協力いただきますようお願い申し上げます。

職員としては学生食堂での食事提供から始まり、学生の健康管理、生活指導や学生自治会対応に関わってきました。全寮制から希望寮生への変換期には、学生自治会の会則改正や学生食堂の給食制度の変更など、学生たちとともに改善活動に取り組んできました。学生寮や学生食堂の運営は利用者からの収入が頼りですので、同窓生の皆様方にも学生募集や金活動にご協力を賜りたくご支援のほどよろしくお願い申し上げます。

*鯉淵学園教育研究報告は、
<https://www.koibuchi.ac.jp/report/> を参照ください。

*「調理実習室」は築50年、「集団給食実習室（旧学生食堂）」は築45年です。これからも栄養士養成教育を続けていくためにも皆様方からのご支援を賜りますようお願い申し上げます。

への変更、カリキュラム改正、学生の調理技術向上のための取り組み、コロナ禍での試行錯誤の状況、就職指導の成果などは鯉淵研報に寄稿しておりますので合わせてご確認いただければと思います。栄養士養成は今年で55年目を迎えます。現在の食品栄養科（2年制課程・定員40名）は平成23年度以降14年間で6578期生・計428名の栄養士を輩出しています（年平均31名）。茨城県内には栄養士養成校が3校、管理栄養士養成校が4校と、他県と比較しても多く、少子化が進む中でどの養成校も学生募集に熱心に取り組んでいる様子が見受けられます。そのような中でも令和7年度の入学生を25名迎えられたことは、本校が茨城県の県央部にあり比較的の人口が多いことや通学しやすい立地であるとともに、本校の栄養士養成教育の成果として同窓生の働きぶりが認められ、様々なところで好評価をいただいているからこそと考えています。

これからも栄養士養成を続けていくためには必要なことは、栄養士を志す学生および保護者の皆様方に選択いただける魅力的な学校作りが肝要と考えています。私たちもしっかりと取り組んでいきますので、同窓生の皆様方にも学生募集や金活動にご協力を賜りたくご支援のほどよろしくお願い申し上げます。

鯉淵学園 教育研究報告第35号のご紹介



教育研究報告
編集委員長
野口貴彦

品栄養科）の「鯉淵学報」創刊そして『鯉淵研報』へが掲載されました。第35号の論文掲載数は、第30号（休刊後の再発行）以来最大の8報となつており、本校教育研究報告編集委員長の野口と申します。日頃から同窓生の皆様には本校の教育についてご理解とご支援を賜り感謝申し上げます。

鯉淵学園 教育研究報告（鯉淵研報）第35号（総説1報、報文1報、事例報告2報、解説3報、随想1報の計8報を掲載）を令和7年3月に無事発行することができました。論文は、総説として藤井義晴先生（アグリビジネス科、東京農工大学名誉教授）の「ムクナ豆（ハツショウマメ）の起源・栽培方法・機能性と今後の利用の展望」が、報文として井上洋一先生（アグリビジネス科）の「集落営農組織の現状とその役割」が、事例報告として浅津竜子先生（食品栄養科）の「食品栄養科における就職指導について」と勝山由美先生ら（食品栄養科）の「教育・研究チームによる学習サポートの取り組みとその成果」が、解説として泉田光先生（食品栄養科）の「トマトに含まれるリコピンの生理作用について」、高崎瑞穂先生ら（食品栄養科）の「新型コロナウイルス感染症流行下における食中毒発生状況の変化」と望月真友先生（食品栄養科）の「古代米とは？その栄養価と今後の可能性」が、随想として筆者（食

品栄養科）の「鯉淵学園」創刊そして『鯉淵研報』へが掲載されました。第35号の論文掲載数は、第30号（休刊後の再発行）以来最大の8報となつており、本校教育研究報告編集委員長の野口と申します。日頃から同窓生の皆様には本校の教育についてご理解とご支援を賜り感謝申し上げます。

鯉淵学園 教育研究報告（鯉淵研報）第35号（総説1報、報文1報、事例報告2報、解説3報、随想1報の計8報を掲載）を令和7年3月に無事発行することができました。論文は、総説として藤井義晴先生（アグリビジネス科、東京農工大学名誉教授）の「ムクナ豆（ハツショウマメ）の起源・栽培方法・機能性と今後の利用の展望」が、報文として井上洋一先生（アグリビジネス科）の「集落営農組織の現状とその役割」が、事例報告として浅津竜子先生（食品栄養科）の「食品栄養科における就職指導について」と勝山由美先生ら（食品栄養科）の「教育・研究チームによる学習サポートの取り組みとその成果」が、解説として泉田光先生（食品栄養科）の「トマトに含まれるリコピンの生理作用について」、高崎瑞穂先生ら（食品栄養科）の「新型コロナウイルス感染症流行下における食中毒発生状況の変化」と望月真友先生（食品栄養科）の「古代米とは？その栄養価と今後の可能性」が、随想として筆者（食

品栄養科）の「鯉淵学園」創刊そして『鯉淵研報』へが掲載されました。第35号の論文掲載数は、第30号（休刊後の再発行）以来最大の8報となつており、本校教育研究報告編集委員長の野口と申します。日頃から同窓生の皆様には本校の教育についてご理解とご支援を賜り感謝申し上げます。

鯉淵学園 教育研究報告（鯉淵研報）第35号（総説1報、報文1報、事例報告2報、解説3報、随想1報の計8報を掲載）を令和7年3月に無事発行することができました。論文は、総説として藤井義晴先生（アグリビジネス科、東京農工大学名誉教授）の「ムクナ豆（ハツショウマメ）の起源・栽培方法・機能性と今後の利用の展望」が、報文として井上洋一先生（アグリビジネス科）の「集落営農組織の現状とその役割」が、事例報告として浅津竜子先生（食品栄養科）の「食品栄養科における就職指導について」と勝山由美先生ら（食品栄養科）の「教育・研究チームによる学習サポートの取り組みとその成果」が、解説として泉田光先生（食品栄養科）の「トマトに含まれるリコピンの生理作用について」、高崎瑞穂先生ら（食品栄養科）の「新型コロナウイルス感染症流行下における食中毒発生状況の変化」と望月真友先生（食品栄養科）の「古代米とは？その栄養価と今後の可能性」が、随想として筆者（食

鯉淵学園教育の近況と学生募集協力へのお願い



入試支援担当
前嶋 智

日頃より本校事業にご理解・ご協力を賜り誠にありがとうございます。開学80周年を迎える今年度も新たに策定されたスクールプランのもと、さらなる教育事業の拡充・募集活動の強化に取り組んでいます。

多様化そして原点回帰

開学以来全国各地から農と食の実践的な学びの場を求める若者たちを迎え入れ教育に取り組んできた本校ですが、社会の多様化が進む中で入学者の資質も少しずつ変化・多様化してきました。小職が勤務し丁度30年になりますが、多様な個性の切磋琢磨は農と食に関わる多様な分野で貢献できる人材を輩出することに少なからず貢献してきたと考えています。しかしながら、毎年入学する多様な学生の中には様々な理由から学園を後にする者もわずかながら存在します。本校としても農と食の学びに求められる多様化に応えるべく取り組んでいます

学生募集協力へのお願い

学生募集は厳しい状況が続いているますが、鯉淵学園ならではの教育展開をすすめるべく、入試選抜段階でも意欲・適性の比重を重視してまいります。具体的には総合型選抜では新たにグループワークを取り入れるなど入試手法を工夫いたします。厳しい募集状況下で志願者の資質を厳しく選考することは矛盾する部分もありますが、眞の学園再興を目指す志をもつて選考する所存です。同窓会諸氏におかれましても、可能な範囲で本校を周知いただくなどして、意欲ある入学生の獲得へのご協力を戴けましたら幸いです。



アグリビジネス科
畜産コース
1年 及川紀子

私の家は北海道で酪農業をしています。小さいころから家の手伝いをしており農業に関わることが多くありました。また、高校では農業高校に通い、家の酪農だけではなく幅広い農業の在り方を学んできました。

高校で農業について学んでいく中で、北海道だけではなく、本州

の農業も実際に体験したいと考え、鯉淵学園への入学を決めました。

鯉淵学園の授業は農業の基本から専門的な分野まで幅広く知ることができます。また、実習だけではなく朝夕の管理当番も行っており、一人一人が責任をもって管理することができるという魅力があります。

研究活動もできるので、いろんなことに目を向けて農業の理解を深めていきたいと思います。そして、しっかりと経験を積んで家業を継ぎたいと思います。

私は農業関係の職に就きたいと思い種まきから販売まで学べる鯉淵学園の入学を決めました。

入学してからの日々は1日過ぎるのがあっという間に感じるほどに毎日が充実していてとても楽しく過ごしています。それはわからないことがあっても丁寧に優しく教えて下さる先輩方や先生方のおかげであります。この学園に入学してただ仕事に就くことだけを目指すのではなく、人に教えて説明できるほどの知識や技術も少しでも多く身につけたいと考えています。

そのため日々の講義や農場での実習を大切にし、たくさんのことを取り組んでいきたいです。また、勉強



アグリビジネス科
アグリビジネスコース
1年 露久保譽志哉

面では定期テストの最高評価や資格取得を目標として頑張ります。2年間しかない学生生活を有意義なものとするために授業だけでなく放課後も大事にしていきます。卒業する頃には悔いのないように何事も全力で取り組んでいきます。

私は、食がもたらす栄養と健康について学び、将来的には食物アレルギーに精通した栄養士になる事を目指し、鯉淵学園農業栄養専門学校に入学しました。その目標を達成するため、以下の抱負を立てました。

まずは、栄養士実力認定試験でA判定を取る事です。学ぶ事に対して受動的にならぬように、疑問点や分からぬことをそのままにせず、積極的に質問するなどして、しっかりと知識を吸収していきたいと思います。

次に、献立作成と調理技術の実践力を身につける事です。健康をサポートするべく、季節ごとの旬を意識した食事を安全に美味しく食べてもらえるように、講義・実習にしっかりと臨み技術の向上に努めていきたいと思います。

また、課題解決力を会得することを目指し、積極的にコミュニケーションを図り、行動力や責任感など社会で働くためのスキルを磨きながら、目標達成に向け勇往邁進していきたいと思います。

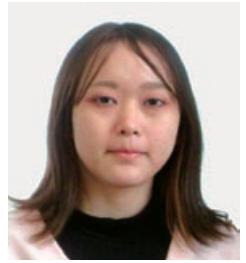
新入学生 の抱負

私は、スポーツ関連の職に就きたいという目標をもち、鯉淵学園農業栄養専門学校の食品栄養科に入学しました。その目標を達成するために、以下の抱負を立てました。

まずは、定期テストでA判定以上を取ることです。1回1回の講義を大切にするだけでなく、普段から予習復習を行い、知識を自分のものにしていきます。

次に、調理技術の向上です。調理実習に加えて自宅でも料理に取り組み、習ったことの復習と自分で興味を持った料理を作りたいです。

これらの目標を達成するために、普段の講義・実習を大切にし、わからない点は先生方への質問や自分で調べ学習を行い、知識や技術を身につけたいと思います。また、卒業後は実務経験を積み、管理栄養士の取得を目指しています。仕事と勉強の両立は大変だと思いますが、目標に向けて努力していきたいと思います。



食品栄養科
1年 中村 遥



食品栄養科
1年 堀 来愛

第31期生会を 「城崎温泉」で開催

コロナウイルス感染症の影響で延期になっていた第31期生同期会を、令和5年11月22日、兵庫県豊岡市「城崎温泉」で開催しました。

「城崎温泉」は京都・大阪から電車で約3時間と、遠隔地での開催でありながら27名（男性16名・女性11名）の参加がありました。感謝いたします。

次回の同期会は、長野県内で開催することに決まりました。



兵庫県支部だより（第18号）が発刊されました

平成24年1月より支部だよりを発行
されている兵庫県支部より、第18号発
刊のご連絡を頂きました。同窓会HP
に掲載しておりますので詳しくはそち

「農研友の会」の皆さん
が学園を訪問されました

令和6年8月25日、「農村社会研究会友の会」の皆さん、学園にお出でになりました。研究会の仲間が学園卒業後に「友の会」を結成され、各地で同窓会を開催されたり記念誌を発刊されたりと、継続的に活動を行ってこられました。



第34期「あわら温泉」を開催する会

第34期生同期会が10月23日に、福井県あわら市あわら温泉「まつや千千」で開催されました。5年ぶりの開催

れたそうです。今回久しぶりに14期生3名の皆さん（新潟県、茨城県、徳島県）が笠間市鯉淵に集まられて、本日学園を訪問されたとの事でした。

写真撮影後に、園芸農場・畜産農場そして女子寮・男子寮を散策されてお帰りになりました。これからもお体に気を付けながら活動を続けて下さい。

25期生大会が開催されました

令和6年11月4日～5日にかけ、和歌山県和歌山市のマリーナシティホテルを会場に、全国から39名が参加され「25期会 in 和歌山大会」が開催されました。

で、34名（同伴家族も含め39名）が参加し、辰やかに執り行われました。開



【 同窓会県支部・卒期別の活動紹介 】

33期生同窓会を茨城で開催
令和6年11月24日(日)から25日(月)にかけ、茨城県大洗町の大洗シーサイドホテルを会場に、2年ぶりに33期生同窓会が開催されました。

令和6年11月24日(日)から25日(月)にかけ、茨城県大洗町の大洗シーサイドホテルを会場に、2年ぶりに33期生同窓会が開催されました。



岩手県支部窓会が開催されました



心の里 鯉淵学園

卒業から半世紀 今は!

KOIBUCHI
College of Agriculture and Nutrition



〒139-0022 美城郡木戸町鶴岡町3065
tel 029-259-2811

写真集「心の里
鯉淵学園」の発行
同窓会副会長の若林英一氏(25期卒)が昨年和歌山県で開催された同期会の参加者へ写真集を作成して配布されました。詳しく述べてご覧下さい。

同窓会HPに掲載しておりますので
<http://koibuchi.main.jp/>

写真集「心の里 鯉淵学園」の発行



20期生の皆さん が学園を訪問されました

令和6年11月9日、20期生の皆さんが学園にお出でになりました。北は北海道、南は福岡県から16名の参加でした。

当日は学園祭「いちょう祭り」が開催されており、とても賑やかな中での訪問となりました。

着きました。
総会終了後は懇親会が行われ、賑やかに情報交換が行われました。

「第36回同窓会大会」 が書面決議で 実施されました

令和7年1月27日(月)「第36回同窓会大会」は、同窓会役員4名、常任委員10名、監事2名の計16名へ総会議案書が郵送され、締切に設定した2月14日(金)までに14名から返信を頂き、賛成多数(全員賛成)で以下の議案が可決されました。

- ①令和5～6年度事業報告並びに収支決算概要
- ②特別会計…能登半島地震への対応報告
- ③令和7～8年度事業計画並びに収支予算(案)
- ④同窓会会則の一部改定
- ⑤令和7～8年度の役員選任

その後、2月18日(火)に全国の都道府県支部長38名へ総会資料を送付し、結果を報告致しました。



学園ニュース

過去1年間、同窓会ホームページ(<http://koibuchi.main.jp>)に掲載された学園の主なニュースをご紹介します。

藤井教授がニュース番組に出演されました

令和6年5月24日夕方のANNニュースに学園の藤井義晴教授が出演され、外来植物「ナガミヒナゲシ」の危険性について解説されました。「ナガミヒナゲシ」は現在日本全国に生息し、オレンジ色の綺麗な花でその見た目のかわいらしさから、小さな子供でも思わず触つてしまいそうですが、危険な毒を含む植物だそうです。皆さんも十分にご注意下さい。



令和6年度卒業生の新堀さんと令和6年度県民健康づくり表彰式で、「ヘルシーニューコンクール」と「季節の食材たっぷり! BARAKAヘルシーランチ」の部門でそれぞれ表彰されました。



食品栄養科の学生と卒業生が表彰されました

卒業・元副学園長が、「保健衛生の向上」部門において令和6年度功績者表彰を受けられました。

茨城県表彰を受けられました

各分野において県勢の発展に著しい功績があつた方などをたたえる「茨城県表彰」において、入江三弥子客員教授(29期卒)が、「保健衛生の向上」部門において令和6年度功績者表彰を受けられました。

令和6年度茨城県表彰

茨城県は、各分野において県勢の発展に著しい功績があつた方などをたたえる茨城県表彰を、毎年11月に実施しています。

今年度は、11月13日に県庁にて表彰式を行い、計63名12団体（特別功労者表彰1名、県民栄誉賞表彰3名、特別功労賞表彰11名、新しいまちづくり表彰6名、3団体、知事賞受賞表彰10名、功労者表彰32名、9団体）の方々を表彰しました。

令和6年度茨城県表彰受賞者について

氏名、年齢、現住所、主な職業、功績概要は次のとおりです。（敬称略、年齢・現住所は令和6年11月13日現在のものです。）

※受賞者のうち、年齢・現住所・姓等を非公表としている方については、掲載しておりません。

保健衛生の向上

入江三弥子（70歳）
笠間市／元公益社団法人茨城県農士会会員
多年にわたり、農士の省農向上と栄養改善を中心とした健康づくり事業に尽力するとともに、会の役員として積極的充実農業と保健衛生の向上に貢献した。

「おきなわの料理本」発刊に寄せて



島やさい工房
「かめさんといっしょ」
山内 都子
(旧姓 島袋)
(51期卒)

2010年8月、沖縄県読谷村にて2坪ほどの小さな場所で、島やさい工房「かめさんといっしょ」を開業しました。琉球料理や沖縄の家庭料理、島野菜＆野草を使った料理の宅配販売と料理講習などを行つてます。店名の「かめさんといっしょ」は開業するきっかけとなつた祖母の名前「かめ」で、一緒に料理をする大切さと初心を忘れない想いから名付けました。

沖縄の料理は、料理の基本と全く違つた方法で料理をする事もありますが、食材一つ一つの特徴を大切にし、旨みを引き出し、医食同源の考えに基づいた先人の知恵がつまつた料理です。

これまで関わつた多くの方々から、たくさんのことをお教わり、経験をさせて頂き、沖縄の食文化の素晴らしさを学ばせて頂きました。開業当時から影で一番に支えてくれた父の勧めもあり、10周年という節目に、これまでの活動から「残していただきたい味」と「島野菜を使つたレシピ」を本にまとめました。

学生時代は遊ぶことに夢中な時期もありましたが、「食」を伝える立場になり、鯉淵学園で学んだ実習や農業体験が、他の専門学校にはない凄く貴重な学びだつたと感じています。

先生方や先輩方に感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございます。今後ともご指導宜しくお願ひ致します。



令和6年10月～令和7年4月納入者

同窓会永年会費

60 38 37 37 33 33 28
小木伊伊吉伍今
林村藤藤田井井
浩雄優満悦國
己一子進希雄
子

琦^茨琦^琦琦^琦石^石
玉城玉玉玉玉川

同窓会年会費

通
4 70 67 65 63 60 49 47
田佐福上木小渡山
村藤濱野村林部下
幸真由圭好浩佐弘
三緒美介作己絵子
北海道城野城城玉島川

同窓会寄付金

特
選
24 24 24 23 23 23 23 23 23 23 22 22 22 22 21 20 20 19 19 18 17 17 16 16 15 15 15 13 5 2
田飯竹中坂新松九山江小段湯廣館中齋高西池中石平石小久保宮佐小湯梅砂佐藤
部澤原村口関田石中幡野田口木藤山藤橋野間鉢田木川林久保宮佐小湯梅砂佐藤
井寺
な純修ミ八信裕宗ゆ恭康文正洋和忠昭茂礼佐郁信勝繁一紀孝臣義和一郎
敏を悦一ヨ千子治良範章子人子子彦子雄子登夫子弘義正宏久子
明子子代子明
群山岩茨佐静福柄茨茨山山長茨岩青岩茨茨東宮千鳥群群山沖秋秋宮茨茨新
馬形手城賀岡井木城城形口野城手森手玉城京城葉取馬馬口繩田田崎城城潟

54 49 47 46 46 39 37 37 34 31 30 29 29 28 28 27 27 27 27 27 26 26 26 25 25 25
伊結山宮植小刀丸朝石利青竹坪今加鈴飯手鈴佐小松植戸谷平後大森渡
藤城下城田船補山倉塚根木前野井藤木塚木藤沼本松塚澤沼藤塚本瀬
真律弘明尚久久安富一和久正國鉱一ひ貞利俊一延博常秀俊照松
紀子蔵生亨美美則成久晃之子司雄一成ろ男通之弘香行昭治雄一秋美雄
子
茨北石沖和茨山長福新神茨長新石山長長柄茨茨福岩山群茨茨大愛福石富子新千群柄山山愛奈兵静長
海歌奈
城道川繩山城口野井潟川城野潟川形野野木城城島手梨馬城城分媛井川山 潟葉馬木形形媛良庫岡野

選
22 22 22 22 22 21 21 20 20 19 19 19 19 19 18 17 17 17 16 16 15 15 14 14 13 13 13 11 10 7 7 5 2
段高湯高廣館佐藤佐植西井出池齋中升石大平石小久宮堀小原島石白梅道柴唐寺立砂佐
田木口山木藤藤村藤木野上店間藤鉢田城木川林保城田嶋崎田崎崎下橋尾見田藤
恭経康忠文正雅政幸昭嘉利茂信礼文佐郁信勝充清一壽孝喜重勇政健義和一郎
範吉章夫子人子隆功輔子保彦雄子子夫登昇夫子弘義正弘宏弘重秀一臣美吉勝祐雄
留美正
山兵長長茨岩北岩岩新茨島兵東柄宮北千沖鳥群群山沖茨秋静岐島福茨岩茨福新茨茨新
口庫野野城手手潟城根庫京木城道葉繩取馬馬口繩城田岡阜根井城手城島潟城城潟

特
27 27 27 27 26 26 26 25 25 25 25 25
佐松千武同植戸谷平松後加大森土
藤本葉田期松塚澤沼本藤藤塚本谷
俊照猛參延博常カ秀尚俊照順
之香雄見加行昭治雄ズ一秋美子
英
茨岩岩岩山群茨茨宮大愛愛福福富子新千群柄福福山岩北福鳥兵愛静長長群茨山岩茨沖佐島静琦茨茨山岩
城手手梨馬城城崎分媛媛井井山 潟葉馬木島島形手道岡取庫媛岡野野馬城形手城繩賀根岡玉城城形手

通通通通
4 2 1 1 65 60 57 55 54 54 54 49 49 47 46 46 44 39 37 37 36 35 34 33 33 33 32 31 30 29 29 28 28 28 28 27 27 27 27
江和西本上小小佐由伊及佐渡山宮秋富小丸朝岸松石太伍石鈴
本澤間野林森藤井藤川飛部下城葉岡船山倉根本塚田井塚木
幸省圭浩大洋真英充佐弘明勝忠久安富秀一一千悦仁、巖
透雄廣吉介己亮介平紀惠浩絵藏生矢明美則成明利久尋雄法子
山高宮宮茨琦群北長起茨北福福石沖茨東茨長福兵福新長琦茨
口知崎城城玉馬道野城道井島川繩城京城野井庫島潟野玉城岡庫
順子柄茨

鯉淵学園同窓会 都道府県支部長名簿 (令和7~8年度)

支部	支部長名	卒期
北海道	中井 弘	23期卒
青森県	藤村 義美	28期卒
岩手県	千葉 照雄	27期卒
宮城県	山家 賢藏	24期卒
秋田県	山本 平男	24期卒
山形県	長橋 雅司	28期卒
福島県	五十嵐竹男	23期卒
茨城県	大橋 晃市	32期卒
栃木県	池崎 誠二	34期卒
群馬県	久保 好唯	34期卒
埼玉県	清川 完司	24期卒
千葉県	卜部 泰郎	19期卒
東京都	野澤 ゆう	56期卒
神奈川県	志村 隆	23期卒
新潟県	重野 徳夫	23期卒
富山県	石倉 彰	31期卒

支部	支部長名	卒期
石川県	宮崎 章	25期卒
福井県	安実 正嗣	24期卒
山梨県		
長野県	青木 敏	20期卒
岐阜県	梅本 広市	32期卒
静岡県	神尾 尚宏	51期卒
愛知県	久胡 信隆	21期卒
三重県	北川 勝己	23期卒
滋賀県		
京都府	奈良井 真	23期卒
大阪府	成田 正幸	17期卒
兵庫県	福井 寛行	26期卒
奈良県	堂阪 清文	24期卒
和歌山県	松浦 義人	23期卒
鳥取県	佐藤徳太郎	23期卒
島根県	飯塚 伸広	55期卒

支部	支部長名	卒期
岡山県	平田 精一	24期卒
広島県	桑原 謹二	12期卒
山口県	田中 耕二	25期卒
徳島県	逢坂 新治	23期卒
香川県	川崎 武司	19期卒
愛媛県	大塚 俊秋	25期卒
高知県	山下 秀雄	23期卒
福岡県	三島 守人	26期卒
佐賀県	近藤 弘道	23期卒
長崎県	尾崎 原喜	27期卒
熊本県	井 晴生	26期卒
大分県	甲斐 文義	26期卒
宮崎県	長友 文彦	29期卒
鹿児島県	川元 昭司	24期卒
沖縄県	前田 実	30期卒
学園内支部	秋葉 勝矢	46期卒

鯉淵学園同窓会新役員名簿（任期 令和7～8年度）

会長	黒澤 賢治	25期卒	群馬県支部
副会長兼常任委員長	若林 英一	25期卒	栃木県支部
副会長	大橋 晃市	32期卒	茨城県支部長
副会長兼事務局長	石塚 仁	33期卒	茨城県支部
常任委員	卜部 泰郎	19期卒	千葉県支部長
//	五十嵐竹男	23期卒	福島県支部長
//	江幡ゆき子	23期卒	茨城県支部
//	青木 敏	20期卒	長野県支部長
//	久保 好唯	34期卒	群馬県支部長
	小林 梅代	35期卒	茨城県支部

常任委員	富岡 忠明	44期卒	東京都支部
//	秋葉 勝矢	46期卒	学園支部長
//	神尾 尚宏	51期卒	静岡県支部長
//	熊谷 隆	54期卒	埼玉県支部
//	野沢 ゆう	56期卒	東京都支部長
監事	平沼 常雄	26期卒	茨城県支部
//	浅津 竜子	47期卒	学園支部
顧問	倉辻 芳次	19期卒	茨城県支部
//	長谷川量平	一	鰐淵学園 学園長

局に多数届いております。

新体制となつた学園は「真生鯉淵」のスローガンの下、新しい歩みを始めて います。少子高齢化が進む中、「農業と食料」の大切さを引き続き訴え続け、学園存続のためにも同窓生の皆様のご協力を引き続きよろしくお願ひいたします。

最後になりましたが、今年 11 月 21 日に「80 周年記念式典」も計画されておりますので、同窓生の皆様の多数ご参加をお待ちしております。

学園創立80年の節目を迎えるにあたり、本号では
関係の皆様に色々なお立場で原稿を執筆頂きまし
た。ありがとうございました。

編集後記

記載漏れと訂正について

昨年9月末に発行した同窓会報97号の中で、以下の記載漏れと誤記載がありました。

①10ページ「令和6年能登半島地震」欄に記載漏れがありました。以下の内容が追加になります。

② 11ページ「追悼」欄の下段に掲載したお名前の中に、「23雨宮 勇（長野）」とあります。こちらは間違った情報でした。雨宮 勇様他ご関係の皆様、大変申し訳ございませんでした。謹んでお詫び申し上げます。